

# 日本語と中国語のバイリンガルの乳幼児における 語彙の発達<sup>1</sup>

～名詞優位か動詞優位かの検証～

## The Development of Vocabulary in Japanese-Chinese Bilingual Children: Noun Dominance or Verb Dominance

高 飛

Fei Gao

### Abstract

Vocabulary acquisition studies of many languages have demonstrated the superiority of noun acquisition over verb acquisition in children's early vocabulary acquisition. However, studies of Chinese- and Korean-speaking children found the possibility of verb dominance. This study used both quantitative and longitudinal surveys to examine the issue of noun or verb dominance in the vocabulary development of Japanese and Chinese bilingual infants. As a result, noun dominance in Japanese vocabulary comprehension and expression, and verb dominance in Chinese vocabulary comprehension were proved. This result does not support the theory that noun dominance is a universal phenomenon in children's early word acquisition. Other factors, such as language characteristics and caregiver's input, are also thought to affect children's vocabulary acquisition.

### はじめに

子どもの初期の語彙習得における名詞優位性は Gentner (1982) によって主張された。日本語母語乳幼児を対象にした研究 (小椋, 2007) を含め、動詞より名詞習得の優位性が証明されている (Bornstein et al., 2004)。しかし、言語発達初期において、名詞優位は普遍的なものではなく、言語の特性や養育者の言語入力にも関係があると証明する研究もある。中国語母語乳幼児や韓国語母語乳幼児を対象にした研究においては、動詞優位の可能性が観察された (Choi & Gopnik, 1995; Tardif, 1996; Liang et al., 2002; Tardif et al., 2006; Chen et al., 2009)。本研究においては、日本語と中国語のバイリンガルの乳幼児を対象に、名詞優位か動詞優位かの問題について検討を試みた。

## 1. 先行研究

### 1.1 名詞優位理論を支持する先行研究

Gentner(1982)は、「自然分割仮説 (Natural Partition Hypothesis)」を提起し、初期の子どもの語彙習得では名詞優位が普遍的な現象であり、子どもにとっては、知覚上も認知上も名詞が動詞より学習しやすいと説明している。この理論を支持した研究として、Bornstein et al. (2004)は語彙チェックリストを使用し、スペイン語、オランダ語、フランス語、イタリア語、ヘブライ語、韓国語、英語の7言語を母語とする乳幼児269名を対象に、語彙の構成について調べた。その結果、語彙サイズが0-50語では、名詞と動詞の間には有意な差がなかったが、語彙サイズが50-100語と101-200語では、名詞が動詞より有意に多かった。また、藤原他(2006)は12か月～23か月の日本語母語乳幼児310名を対象に、語彙のチェックリストを用いて調査した結果、名詞が他の品詞と比べ、表出語彙に占める割合が高かった。そして、年齢とともに名詞語彙数が増えることがわかった。さらに、小椋(2007)は158名の日本語母語幼児を対象に、マッカーサー乳幼児言語発達質問紙の日本語版を用いて調査した。その結果、名詞が他の種類の単語(形容詞、動詞、閉じた語)より高い比率を占めたことを証明した。

## 1.2 名詞優位理論を支持しない先行研究

Miyata et al. (2003)は、4名の1～2歳の日本語母語乳幼児を対象に、自由ゲーム場面での日本語の使用語彙について観察した。その結果、日本の子どもが個人差が大きく、名詞優位であるか動詞優位であるかについては結論づけられなかった。また、中国語母語乳幼児を対象にした研究において、動詞優位の可能性が観察された。Liang et al. (2002)は1056名の16か月～30か月の北京幼児を対象に、マッカーサー乳幼児言語発達質問紙の中国語版を用いて調査した。その結果、16か月～17か月の幼児において、動詞の比率と名詞の比率には差がなかったが、18か月～30か月の幼児において、動詞の比率は名詞より高かった。Tardif et al. (2006)は8か月～16か月の英語母語乳幼児(アメリカ)265名、中国語母語乳幼児(北京)336名、広東語母語乳幼児(香港)369名を対象に、マッカーサー乳幼児言語発達質問紙の英語版、中国語標準語版、広東語版を用いて調査した。その結果、語彙の産出において、英語母語乳幼児では、名詞の比率は動詞より高かったが、中国語母語乳幼児は動詞の比率は名詞より高かった。Chen et al. (2009)は録画観察、マッカーサー乳幼児言語発達質問紙の中国語版を使用し、1名の中国語母語乳幼児を対象に6か月から20か月まで縦断的に調査した。調査の結果、15か月において、語彙の表出でも語彙の理解でも、動詞の比率は名詞より高かった。16か月において、語彙の表出では名詞の比率は動詞より高かったが、語彙の理解では動詞の比率は名詞より高かった。17か月において、語彙の表出では動詞の比率は名詞より高かった。

## 1.3 バイリンガルを対象にした先行研究

Setoh et al. (2021)はシンガポールの英語と中国語のバイリンガルの子ども30名を対象に、場面観察の方法を用いて調査した。その結果、英語においても、中国語においても、子どもの語彙は名詞優位であった。しかし、英語の名詞の比率は中国語の名詞の比率より高かったため、

言語の特性も影響を与えると結論づけている。また、Chai et al. (2021) はマレー語母語乳幼児、マレー語と英語のバイリンガルの乳幼児、中国語母語乳幼児、中国語と英語のバイリンガルの乳幼児を4つのグループを対象に、マッカーサー乳幼児言語発達質問紙を使用して調査した。その結果、語彙の理解において、中国語と英語のバイリンガルの乳幼児の英語は、マレー語と英語のバイリンガルの乳幼児の英語と比べ、動詞の比率が高かった。従って、英語以外の要因がバイリンガル乳幼児の英語の語彙習得に影響を与えていると結論した。

#### 1.4 先行研究の問題点と本研究の目的

1.1～1.3 で述べたように、名詞優位か動詞優位かの問題を議論した先行研究は主にモノリンガル乳幼児を対象とした量的な研究であり、バイリンガル乳幼児を対象とした検証は非常に少なかった。そのため、本研究において、日本在住の日本語と中国語のバイリンガルの乳幼児を対象に、量的調査と縦断的調査を併用し、名詞優位か動詞優位かの問題について検証を試みた。

## 2. マッカーサー乳幼児言語発達質問紙

本調査の説明をする前に、先行研究と本研究で使用されたマッカーサー乳幼児言語発達質問紙について説明する。この質問紙は高（2022）でも使用されたが、下記で再度説明する。

マッカーサー乳幼児言語発達質問紙のオリジナルは英語版であるが、その後、各国語に翻訳され、各国語の特徴に合わせて調整された。この質問紙は多くの研究において使用され、子どもの言語発達を評価するための非常に有効なツールだと言える。

マッカーサー乳幼児言語発達質問紙は子どもの月齢によって、表1で示しているように、「語と身振り」と「語と文法」の二つに分かれている。「語と身振り」は一つの単語に対し、「わかる」と「わかる・言う」の二つの選択肢があるため、表出語数（「わかる・言う」の数）と理解語数（「わかる」＋「わかる・言う」の数）を両方調べることができる。一方、「語と文法」は「わかる」という選択肢がないため、「表出語数」のみが調べられる。本研究は、各調査対象児の生活年齢や言語発達の状況に合わせて、「語と身振り」の日本語版（小椋・綿巻, 2004）、中国語版（Tardif et al., 2008）、及び「語と文法」の日本語版（綿巻・小椋, 2004）、中国語版（Tardif et al., 2008）から選択して使用した。「語と身振り」と「語と文法」の日本語版と中国語版の総語彙項目数、名詞数、動詞数を表2で示している。

表1 「語と身振り」と「語と文法」

	日本語版	中国語版
「語と身振り」	8 か月～18 か月	8 か月～16 か月
「語と文法」	16 か月～36 か月	16 か月～30 か月

表2 「語と身振り」と「語と文法」の語彙項目数

	日本語版	中国語版
「語と身振り」	総語数：448 語 (名詞：209 語、動詞：55 語)	総語数：411 語 (名詞：188 語、動詞：78 語)
「語と文法」	総語数：711 語 (名詞：312 語、動詞：104 語)	総語数：799 語 (名詞：322 語、動詞：194 語)

### 3. 量的調査

量的調査において、低月齢の子どものグループ①と高月齢の子どものグループ②を対象に、マッカーサー乳幼児言語発達質問紙を用いて調査し、名詞優位か動詞優位かの問題を検証した。

#### 3.1 調査対象児グループ①に対する調査

##### 3.1.1 調査対象児グループ①の情報と調査方法

グループ①の7名の子ども（男児3名、女児4名）は全員日本で生まれ、日本で育てられている。両親の出身地は全員中国である。7名の内、3名の子どもは第1子であり、4名の子どもは第2子である。調査当時の調査対象児の月齢、入園期間についての情報は以下の表3の通りである。グループ①の子どもは月齢が低いため、マッカーサー乳幼児言語発達質問紙の「語と身振り」版を使用し調査した。具体的には、「語と身振り」の日本語版と中国語版を対象児の保護者に配り、記入してもらった。

表3 調査対象児グループ①の情報

	平均値	標準偏差	最大値	最小値
月齢（月数）	16.71	2.86	22	12
入園期間（月数）	3.71	3.61	10	0

##### 3.1.2 調査対象児グループ①の調査結果

第2章で記述したように、マッカーサー乳幼児言語発達質問紙の「語と身振り」版は、語彙の表出と語彙の理解という二つのデータが収集できる。グループ①の対象児の両言語（日本語と中国語）における表出名詞（話せる名詞）と表出動詞（話せる動詞）の比率の平均と標準偏差は表4に示す。

表4 グループ①の両言語の表出名詞と表出動詞の比率

	表出名詞比率 (日本語)	表出動詞比率 (日本語)	表出名詞比率 (中国語)	表出動詞比率 (中国語)
平均値 (%)	1.57	0.11	2.74	3.48
標準偏差 (%)	1.93	0.18	5.69	5.16

調査対象児グループ①のデータをウィルコクソン符号付順位検定によって分析した結果、日本語における表出名詞と表出動詞の比率の間に有意傾向が見られ、表出名詞の比率は表出動詞の比率より高かった ( $z=1.86, p=.06$ )。効果量は大であった ( $r=.70$ )。しかし、中国語における表出名詞と表出動詞の比率を比較した結果、有意差が見られなく ( $z=.73, p=.47$ )、効果量も小であった ( $r=.28$ )。

グループ①の対象児の両言語における理解できる名詞（話せる名詞+聞き取れる名詞）と理解できる動詞（話せる動詞+聞き取れる動詞）の比率を以下の表5に示す。

表5 グループ①の日本語と中国語の理解名詞と理解動詞の比率

	理解名詞比率 (日本語)	理解動詞比率 (日本語)	理解名詞比率 (中国語)	理解動詞比率 (中国語)
平均値 (%)	10.73	6.49	32.67	51.47
標準偏差 (%)	14.40	9.90	21.99	31.14

ウィルコクソン符号付順位検定を行った結果、日本語における理解名詞の比率と理解動詞の比率の間には有意差があり、理解名詞の比率は理解動詞の比率より高かった ( $z=1.99, p<.05$ )。そして、効果量は大であった ( $r=.75$ )。また、中国語における理解名詞の比率と理解動詞の比率の間にも有意差が見られ、理解動詞の比率は理解名詞の比率より高かった ( $z=1.99, p<.05$ )。そして、効果量は大であった ( $r=.75$ )。

### 3.2 調査対象児グループ②に対する調査

#### 3.2.1 調査対象児グループ②の情報と調査方法

グループ②の13名の子ども（男児4名、女児9名）は全員日本で生まれ、日本で育てられている。両親の出身地は全員中国である。13名の内、11名の子どもは第1子であり、2名の子どもは第2子である。調査当時の調査対象児の月齢、入園期間についての情報は以下の表6に示す。グループ②の子どもは月齢が大きいため、マッカーサー乳幼児言語発達質問紙の「語と文法」版を使用し調査した。具体的には、「語と文法」の日本語版と中国語版を対象児の保護者に依頼し、記入してもらった。

表6 調査対象児グループ②の情報

	平均値	標準偏差	最大値	最小値
月齢 (月数)	37.46	4.29	45	30
入園期間 (月数)	13.62	10.91	36	0

### 3.2.2 調査対象児グループ②の調査結果

マッカーサー乳幼児言語発達質問紙の「語と文法」版は、語彙の表出のみが収集できるため、以下の表7において、グループ②の対象児の両言語における表出名詞（話せる名詞）と表出動詞（話せる動詞）の比率を示す。

表7 グループ②の日本語と中国語の表出名詞と表出動詞の比率

	表出名詞比率 (日本語)	表出動詞比率 (日本語)	表出名詞比率 (中国語)	表出動詞比率 (中国語)
平均値 (%)	46.52	35.87	59.94	56.50
標準偏差 (%)	17.73	29.90	26.14	27.40

ウィルコクソン符号付順位検定を行い、日本語における表出名詞と表出動詞の比率を比較した結果、表出名詞の比率は表出動詞の比率より有意に高かった ( $z = 2.13, p < .05$ )。そして、効果量は大きであった ( $r = .59$ )。しかし、中国語における表出名詞と表出動詞の比率を比較した結果、有意差が見られなかった ( $z = .98, p = .33$ )。効果量も小であった ( $r = .27$ )。

## 4. 縦断的調査

縦断的調査において、マッカーサー乳幼児言語発達質問紙を用い、2名の子どもに対し縦断的に調査した。

### 4.1 調査対象児Aに対する調査

#### 4.1.1 調査対象児Aの情報と調査方法

調査対象児A（女児、第2子）は日本で生まれ、日本で育てられ、調査当時日本のN市に住んでいた。A児の両親は二人とも中国出身であり、高度な日本語能力を持っている。A児は21か月から保育園に通い始めた。保育園に入園するまで、言語環境はほぼ中国語であった。

調査方法に関しては、マッカーサー乳幼児言語発達質問紙（語と身振り）の日本語版、中国語版をA児の両親に依頼し、記入してもらった。調査時期はA児が15か月、16か月、17か月、18か月、20か月、21か月、22か月、23か月の時であった。

#### 4.1.2 調査対象児Aの調査結果

A児の両言語における表出名詞（話せる名詞）と表出動詞（話せる動詞）の比率は以下の表8に示している。日本語の語彙の表出において、A児は22か月から名詞を先に話しはじめ、23か月から動詞を話し始めた。22か月と23か月において、日本語の表出名詞の比率は表出動詞の比率より高かった。一方、中国語の語彙の表出において、16か月から動詞を先に話しはじめ、18か月から名詞を話し始めた。16か月～23か月の間、中国語の表出動詞の比率は表出名詞の

比率より高かった。

表8 A児の日本語と中国語の表出名詞と表出動詞の比率

生活年齢 (月齢)	表出名詞比率 (日本語)	表出動詞比率 (日本語)	表出名詞比率 (中国語)	表出動詞比率 (中国語)
15 か月	0.00	0.00	0.00	0.00
16 か月	0.00	0.00	0.00	3.85
17 か月	0.00	0.00	0.00	3.85
18 か月	0.00	0.00	1.60	3.85
20 か月	0.00	0.00	1.60	5.13
21 か月	0.00	0.00	3.19	6.41
22 か月	2.39	0.00	6.91	8.97
23 か月	4.31	3.64	12.77	15.38

注：単位は%である。

また、両言語における理解できる名詞（話せる名詞+聞き取れる名詞）と理解できる動詞（話せる動詞+聞き取れる動詞）の比率は以下の表9に示している。日本語の語彙の理解において、A児は20か月から名詞を先に理解しはじめ、21か月から動詞を理解し始めた。20か月～23か月の間、日本語の理解名詞の比率は理解動詞の比率より高かった。一方、中国語の語彙の理解において、全調査期間において、理解動詞の比率は理解名詞の比率より高かった。

表9 A児の日本語と中国語の理解名詞と理解動詞の比率

生活年齢 (月齢)	理解名詞比率 (日本語)	理解動詞比率 (日本語)	理解名詞比率 (中国語)	理解動詞比率 (中国語)
15 か月	0.00	0.00	4.79	17.95
16 か月	0.00	0.00	19.15	42.31
17 か月	0.00	0.00	19.15	39.74
18 か月	0.00	0.00	43.09	61.54
20 か月	3.35	0.00	53.72	66.67
21 か月	5.74	1.82	61.17	83.33
22 か月	12.44	0.00	69.68	82.05
23 か月	19.14	3.64	72.34	85.90

注：単位は%である。

## 4.2 調査対象児 B に対する調査

### 4.2.1 調査対象児 B の情報と調査方法

調査の対象児 B（女兒、第1子）は調査当時日本の K 市に住んでいた。両親は二人とも中国出身であり、高度な日本語能力を持っている。B 児は日本で生まれ、日本で育てられ、18 か月から保育園に通い始めた。

調査方法に関しては、マッカーサー乳幼児言語発達質問紙（語と文法）の日本語版、中国語版を B 児の両親に依頼し、記入してもらった。調査時期は B 児が 27 か月、29 か月、31 か月、33 か月、35 か月の時であった。マッカーサー乳幼児言語発達質問紙の「語と文法」版は、語彙の表出のみが収集できるため、聞き取れるという語彙の部分を引き出すために、「聞き取れる」という選択を各語についてチェックできるように変更を加えた。ただし、B 児の養育者にとって、B 児が日本語の語彙をどれほど聞き取れるかの判断が難しかったため、「聞き取れる」という選択は中国語の語彙のみであった。

### 4.2.2 調査対象児 B の調査結果

B 児の両言語における表出名詞（話せる名詞）と表出動詞（話せる動詞）の比率、及び中国語における理解できる名詞（話せる名詞+聞き取れる名詞）と理解できる動詞（話せる動詞+聞き取れる動詞）の比率は以下の表 10 に示している。

表 10 B 児の日本語と中国語の名詞比率と動詞比率

生活年齢 (月齢)	表出名詞 比率 (日)	表出動詞 比率 (日)	表出名詞 比率 (中)	表出動詞 比率 (中)	理解名詞 比率 (中)	理解動詞 比率 (中)
27 か月	8.01	3.85	50.93	36.08	68.63	71.65
29 か月	11.86	3.85	60.87	56.19	76.09	86.60
31 か月	17.95	4.81	66.77	59.79	82.61	86.60
33 か月	43.27	39.42	70.19	65.46	81.68	88.66
33 か月	50.96	49.04	77.02	72.16	85.09	92.27

表 10 で示しているように、全調査期間において、日本語の表出語彙も、中国語の表出語彙も、名詞の比率は動詞より高かった。両言語において、名詞の産出は動詞より多かったという結果から、調査対象児 B の語彙産出における名詞の優位性が見える。しかし、中国語語彙の理解において、理解できる動詞の比率は理解できる名詞の比率より高かった。日本語における理解できる名詞と動詞のデータが取れなかったため、両言語を比較することができないが、語彙理解の程度から、調査対象児 B の中国語における動詞優位の可能性も窺える。

## 5. 調査結果のまとめと考察

### 5.1 調査結果のまとめ

量的調査の結果および縦断的調査の結果を表 11 でまとめている。第 5 章では、この調査結果に基づき、考察していく。

表 11 量的調査と縦断的調査の結果のまとめ

	低月齢グループ	高月齢グループ	低月齢 A 児	高月齢 B 児
語彙理解 (日)	名詞>動詞 *	×	名詞>動詞	×
語彙表出 (日)	名詞>動詞 †	名詞>動詞 *	名詞>動詞	名詞>動詞
語彙理解 (中)	動詞>名詞 *	×	動詞>名詞	動詞>名詞
語彙表出 (中)	動詞>名詞	名詞>動詞	動詞>名詞	名詞>動詞

注：\*は有意差ありを意味し、†は有意傾向ありを意味する。×は質問紙にはこの部分の内容がないことを意味する。

## 5.2 考察

### 5.2.1 日本語の語彙理解と語彙表出における名詞優位

表 11 で示しているように、量的調査においても、縦断的調査においても、日本語と中国語のバイリンガル乳幼児の日本語の語彙理解と語彙表出における動詞に対する名詞の優位が観察された。この結果は日本語モノリンガルの乳幼児を対象にした藤原他 (2006) 及び小椋 (2007) の研究結果を支持した。乳幼児の日本語の語彙発達における名詞優位の原因について、藤原他 (2006) において、「動物」、「食物と飲み物」などの事物名称は子どもの日常生活で高頻度で使用されるためと述べている。また、小椋 (2007) において、乳児の語彙獲得過程に関わる制約は名詞の獲得を有利にしていると説明している。

### 5.2.2 中国語の語彙理解における動詞優位

表 11 で示しているように、中国語の語彙理解において、量的調査と縦断的調査の両方の結果から、名詞に対する動詞の優位性が見られた。しかし、中国語の語彙表出において、量的調査では有意差が見られなかった。縦断的調査においても、低月齢の A 児と高月齢の B 児は異なる結果になった。この結果から、名詞優位か動詞優位かの検討は語彙の産出と理解、低月齢児と高月齢児を両方考察する必要があると考える。

中国語の語彙理解における動詞優位という結果は、Chen et al. (2009) の研究結果を支持した。乳幼児の中国語の語彙発達初期における動詞優位の原因について、Chen et al. (2007) では以下の 4 つの理由を述べた。一つ目、中国語の動詞は具体的であるため、知覚上ではより習得しやすい。例えば、英語の動詞 carry は中国語ではいくつもの違う動詞と対応している。本稿の表 2 からも、中国語の動詞の数は日本語の動詞の数よりはるかに多いことがわかる。二つ目、中国語

は英語と同じ SVO 言語であるが、日常会話では主語と目的語がよく省略されるため、動詞の頻度が高く、位置も目立つ。三つ目、中国語は孤立語のため、特に動詞の場合屈折変化がないため、覚えられやすい。最後に、養育者の言語入力と関係がある。英語の母親は名詞を強調し、名詞は語尾で出現する確率が高いが、中国語の母親は動詞を強調し、動詞は語尾で出現する確率が高いと言われる。

### 5.2.3 全体的な考察と本研究の限界

本研究は量的調査と縦断的調査を併用し、日本語と中国語のバイリンガル乳幼児の語彙発達における名詞優位か動詞優位かの問題を検証した。その結果、日本語の語彙理解と語彙表出における名詞優位、中国語の語彙理解における動詞優位を証明することができた。この結果は、この問題を提起した Gentner (1982)が主張した初期の子どもの語彙習得では名詞優位が普遍的な現象という理論を支持しなかった。従って、言語の特性や養育者の言語入力などの要因も初期の子どもの語彙習得に影響を及ぼすと考えられる。

今後の課題として、量的調査においてサンプルサイズを増やす必要がある。また、中国語母語話者の養育者は子どもの日本語語彙力、特に聞き取れるかどうかの部分把握することが難しい面があり、よりよいバイリンガル乳幼児の語彙力、言語力の評価方法が必要ではないかと考える。

### 注

- 1) 本論文の一部は母語・継承語・バイリンガル教育学会 (MHB) 2021 年度研究大会で発表した内容に加筆修正したものである。

### 参考文献

- Bornstein M, Cote L, Maital S, Painter K, Park S Y, Pascual, L., et al. (2004) Cross-linguistic analysis of vocabulary in young children: Spanish, Dutch, French, Hebrew, Italian, Korean and American English. *Child Development*, 75, 1115-1140.
- Chai, J. H., Low, H. M., Wong, T. P., Onnis, L., & Mayor, J. (2021). Extra-linguistic modulation of the English noun-bias: evidence from Malaysian bilingual infants and toddlers. *Journal of Cultural Cognitive Science*, 5(1), 49-64.
- Chen, J., Tardif, T., & Meng, X. Z. (2007). Cross-linguistic differences in children's early word acquisition. *Advances in Psychological Science*, 15 (3), 423-428.
- Chen, J., Setoh, P. P., Meng, X. Z., & Tardif, T. (2009). The influence of adult input on children's early word learning: A case study of a Mandarin-speaking child. *Acta Psychologica Sinica*, 41(8), 715-725.
- Choi S, Gopnik A. (1995) Early acquisition of verbs in Korean: A cross-linguistic study. *Journal of Child Language*, 22, 497-529.

- Gentner, Dedre (1982) Why nouns are learned before verbs: Linguistic relativity versus natural partitioning. In: Stan A. Kuczaj (ed.) *Language development, vol. 2: Language, thought, and culture*, 301-334. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Liang, W. L., Hao, B., Wang, S., et al. (2002) Vocabulary development of toddlers in urban Beijing. *Chin J Pediatr*, 40 (11), 650-653.
- Miyata S, Oshima-Takane Y, Mahieu A. (2003) Noun bias in early Japanese vocabulary and characteristics of maternal speech. *Studies in Language Science*, 3, 87-101.
- Setoh, P., Cheng, M., Bornstein, M. H., & Esposito, G. (2021). Contrasting lexical biases in bilingual English–Mandarin speech: Verb-biased mothers, but noun-biased toddlers. *Journal of Child Language*, 1-24.
- Tardif T. (1996) Nouns are not always learned before verbs: Evidence from Mandarin speakers' early vocabularies. *Developmental Psychology*, 32, 492-50.
- Tardif T. (2006) But are they really verbs? Mandarin words for action. In: K Hirsh-Pasek, R M Golinkoff (Eds.), *Action meets word: How children learn verbs*. Oxford University Press.
- Tardif, T., Fletcher, P., Zhang, Z. X., Liang, W. L., & Zuo, Q. H. (in press) (2008). *The Chinese Communicative Development Inventory (Putonghua and Cantonese versions): Manual, Forms, and Norms*. Peking University Medical Press.
- 小椋たみ子 (2007) 「日本の子どもの初期の語彙発達」『言語研究』132, 29-53.
- 小椋たみ子・綿巻徹 (2004) 『日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙「語と身振り」』. 京都国際社会福祉センター.
- 高飛 (2022) 「バイリンガルの乳幼児における表出語彙の発達と言語環境」『名古屋市立大学人間文化研究』37, 37-47.
- 藤原雅子・笠井新一郎・今給黎禎子・安川千代・松山光生・飯干紀代子・山田弘幸・倉内紀子 (2006) 「1歳代の表出語彙の発達: 品詞による分析; 名詞」『九州保健福祉大学研究紀要』7, 161-168.
- 綿巻徹・小椋たみ子 (2004) 『日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問紙「語と文法」』. 京都国際社会福祉センター.